

5年2組

 わたしたちの手でつくりだそう 草木染の世界  
 ～自然のもので理想の色を～


## けっこうむずかしいな・・・

「自分がイメージする模様をつけたい」草木染のよさは失敗がないことです。素材の状態や量によって色に違いがあります。ある程度ねらった模様もつけられますが、同じ模様はつけにくいです。いわば、そのときの偶然の出会いが草木染のよさでもあります。しかし、「模様をコントロールしたい」という願いが生まれてきました。そこで、「型染め」という技法に挑戦してみることにしました。「型染め」は、防染糊を用いて色がつかない部分を意図的につくる技法です。売っているものではなく、米粉とぬか、塩などで手作りしました。また、「二度染をしてみたい」「模様をもう少し追究したい」などの声もあったので、今回は3つのグループに分かれて研究をすることにしました。

「型染め」グループは、型紙をつくることに苦戦し、はじめてつくる防染糊に戸惑いました。防染糊をつくっていると甘い匂いがしてきました。Aさんは「けっこうむずかしい。均等にならない」と、型紙に防染糊をすりこんでいく作業にてこずっていました。

「二度染め」グループは、新たに「ブルーベリーで紫色をつくってみたい」という考えがあり、ヨモギとブルーベリーでグラデーションをつくってみることにになりました。Bさんは「うおー!紫になってきたぞ!」とイメージしていた色が出てきたことに喜んでいました。さらにヨモギの染液を合わせてみると、「けっこういいのができたよ」と二色に染まった布を見せてくれました。また、媒染をしたところ色がさらに濃い紫になり、媒染の重要性を改めて感じました。



「模様追究」グループは、輪ゴムの止め方やビー玉、割りばしの使い方を研究しました。今までは色につき方に注目してきましたが、どうやって加工したら、だいたいどんな模様がつくのかかわかってきたそうです。



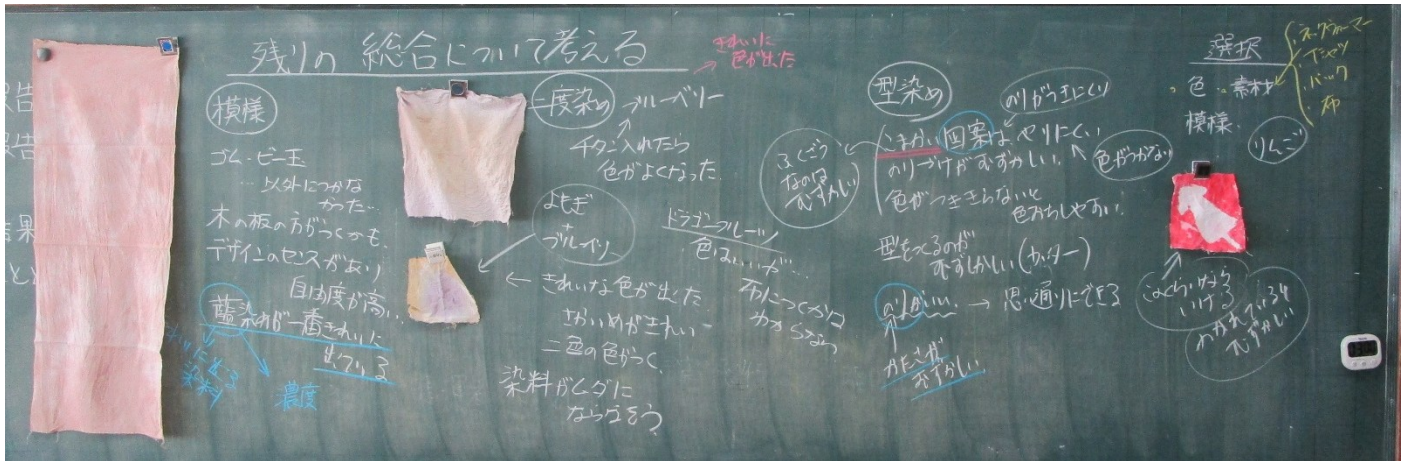
・二度染をしてみました。生のブルーベリーから色が出るか心配だったけど、紫の色が出てきてよかったです。黄色と混ぜて色を付けてみたら、境目がきれいなグラデーションになりました。この染め方もいいなと思いました。媒染をしたら色が濃くなって面白かったです。

・型染めをしました。細かいところはのりがうまくつかなくて思ったようにいかなかったけど、自分の思ったように色が付いたところもあってよかったです。全部手作りできてよかったです。

また、スーパーマーケットで教師が見つけたドラゴンフルーツを研究してみることに。ミキサーにかけた場合、そのまま煮詰めた場合、つぶして煮詰めた場合と今まで染液をつくってきた方法を駆使してドラゴンフルーツ染液づくりしました。Cさんは「どろどろだ～。こんなにピンクになったよ」とはじめて扱う素材に興味深々でした。ドラゴンフルーツは鮮やかなピンク色をしています。煮詰めると濃い色になっていきました。南国の果物は色が鮮やかだなと思いました。



## やっぱり藍染が一番きれいだよ



3つのグループに分かれての追究だったため、研究報告会をしました。それぞれのよさとして「模様追究」グループからは「自由度が高いのいい。でも、やっぱり藍染が一番きれいに模様がでるよ」という意見がありました。

2、3月の活動に向け、「今年最後にどんな染物をしたいのか」と聞くと、やはり「藍染がいい」という意見が出ました。しかし、藍が取れる時期ではないし藍を使った染料になることを伝えると、Dさんから「自然のものでやってきたな・・・」という悩ましい声が聞こえてきました。「自然のもので染料をつくりたい」「でも今の時期ではできないものもある」「自分には染めたい色がある」いろいろな思いが感じられました。今回は「自分のめざす色に染める」を一番に考え、できるだけ自然のものをつかうことになりました。今年最後の挑戦がはじまりました。

## これからは染物の時代じゃない？

社会の時間に「Society5.0」のことを学習しました。インターネットが発達し、AIも進化をしてきた社会は、便利になることがたくさんあることがわかりました。しかし、Eさんが「AIに頼りすぎるのは危なくないかな」と疑問を投げかけました。するとFさんも「AIが発達すると仕事がなくなっていくんじゃないかな？」と言いました。そんな意見が交わされているとGさんが「だったらこれからはAIに真似できない染物の時代だね」と言いました。伝統工芸は人の手で作り出されるからAIはできないという考えだったそうです。

## もう一度、藍染をしたい

本年度、最後の草木染を行うこととなり、今までの学びをふりかえりました。「最後にもう一度藍で染めたい」というHさんからの声がありました。また、黒く染めたいという意見もありました。しかし、藍色や黒の染液は今年一年やってきた「自然のもので染色液をつくる」ということができません。藍はもう取れませんし、時間がかかります。そこでIさんは「化学染料に頼っていいの？」という問いを出してくれました。自然の色の良さを口にしたり、何とかできないかと情報を集めたりしました。しかし、方法は見つかりませんでした。最後に行きついたのは、偶然の色や模様を楽しむことをしてきた今年の活動であったということでした。藍色と黒は、市販の染料を購入し、他のピンクやグレーは今までと同じように、ただし媒染液を工夫して行うことになりました。染液を作る過程で、「ねえ、これ何色になると思う？黄色になると思う人！（数人が手を挙げる）・・・じゃあ、ピンクになると思う人！」ヤマモモの染液をつくりながら、色を予想する会話がありました。ピンク色の染液を作りたいという思いをもった子どもたちはヤマモモの可能性を見つけ、ヤマモモを煮だしていました。予想はできるけれど、どうなるかはやってみないとわからない、草木染の奥深さがそこにはありました。自然のもので染めるということは、不確定で、思い通りにならない。しかし、そこが面白いということが一年を通してわかったのだと思います。そして、それを生業とする職人さん達の努力や、伝統文化の奥深さを学んだ一年でした。

